

眠る本

一読の後

再び開くことなく

鞆の奥底に忍ばせた1冊の本

そのときから

潮が満ちるように、次第に

大気のゆらめきが感触を授け

僕自身の孤独が視線に宿り

あらゆる事物が息づき始め

僕の観察を受け入れるようになったのだ

再び？

言葉は本当に無力なのだろうか

そのことを確かめたかった

生活は整然と並べられるべきだろうか

ただの社会的規範というだけの意味だけでなく...

感覚というものは受動的なものだろうか

そしてそれは浸透を欲するものなのか

それとも固定を欲するものなのか

この世界は色彩に満ちていると言えるのか

点描によって全てを表現することは可能なのか

気まぐれな生

多様性に満ちた世界を作り出そうと

次々と類似に類似を重ねる者たちとはおさらばだ

僕の手元には一冊の本が眠り

黙って問いかける

再び開くことはない本が眠っている

(2003.9.26)